

はじめに

校長 西山 守

今から30年ほど前になる。当時の所属校では、校内研究で特別活動を取り上げていた。研究推進委員として関わっていたので、他の教員より少し深く学べる機会となった。

児童の主体性を伸ばし、集団に寄与する態度を育成していくことの重要性やその方策について、ごく基本的なことのみだが、身に付けることができた。そのころ、区の教育会では、体育研究部に属していたが、校内研究会の度に体育科と通じるところが多々あるように感じていた。

今年8月末に、中央教育審議会の体育科に関わる審議の取りまとめが公表された。

その中に、育成を目指す資質・能力の整理（案）として、「個別の知識や技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力と人間性」が、ポイントとして示されていた。

これを読んだとき冒頭のことが思い出された。

体育科は、スポーツ・運動を通して豊かな生活を営む態度や人間性を育む教科であり、しかも、直接的に人間性につながる行為を身に付けるべき学習内容としているのである。教科外の領域である特別活動もこの点で通じている。

さて、本校の研究主題「互いに学び合い楽しく運動する子の育成」について、今一度、考えてみた。

「互いに学び合い」の内容としては、一人一人が課題をつかみ解決への方策について考え決定し、実際に取り組む。また、同時に、友達と課題を伝え合い、それを共有し、協力（または協働）しながら解決に向かい、学習後には成果を検証し合うことが含まれていると考える。

「楽しく運動する」の内容としては、意欲的主体的に運動に取り組むこと、楽しさや喜びを十分味わうこと、困難に直面しても最後まで粘り強く取り組むことが含まれていると考える。

中央教育審議会の審議の取りまとめには、「主体的・対話的で深い学び」が資質・能力の育成に重要であることが示されている。

これらのことを考え合わせると、期せずして、本校の研究主題「互いに学び合い楽しく運動する子の育成」は、新しい学習指導要領に対応しうる部分を多く含んだものと言える。

ただ、本校の研究には特段に目新しいもの、高度なものはない。今までの先行研究の内容を活用させていただき、むしろ、ポイントを絞って学習のねらいをスリム化し、学習活動を簡易化、具体化し、ゆっくりと一歩ずつ児童の資質・能力を育んでいこうとするものである。高度の指導力がなくても多くの準備時間をかけなくても、少しの「しかけ」をしながら具体的・継続的に児童の学習活動を指導・支援することで、児童が少しずつ成長していけることを目指している。

「体育学習が少しよくなったみたいだ。」本校の研究を参考として実践してくださった方が、このような感想をもっていただけたら、誠に幸いである。

最後に、研究の機会を与えていただいた練馬区教育委員会、そして継続的具体的にご指導いただいた練馬区教育委員会指導主事の方々に深く感謝しお礼申し上げる次第である。

I 研究の概要

1 研究主題

互いに学び合い、楽しく運動する子の育成

2 主題設定の理由

2020年に開催されるオリンピック・パラリンピック東京大会は、児童がスポーツに親しむことはもちろん、障害者理解・国際理解・環境保全などについて関心を高められる好機である。本校でも平成26年度からオリンピック・パラリンピック教育推進校としていくつかの取組みを実施しているが、健康やスポーツを志向し活力ある生活を送ろうとすることは、人生を明るく豊かにすることに大きく寄与していると考え、取組みの継続・充実を図っているところである。

本校では、体育授業アンケートや体力テスト・運動習慣アンケートの結果から、運動が好きとこたえる児童が9割を越えることがわかった。しかし一方で、運動することや体育に対して苦手意識をもっている児童、運動はおおむね好きだが、ある特定の運動に対して苦手意識をもっている児童もいることが明らかになった。

苦手意識がある児童の多くは、運動に経験に偏りがあり多様な運動・遊びの経験が少なく、また、運動の楽しさを実感する機会が少なかったのではないかと考えられる。さらに、運動を多くする児童とほとんどしない児童の二極化は、本校においても課題である。生涯にわたって運動に親しむことができるようにするためには、小学生の時期までに楽しみながら多様な運動経験を積んでいくことが大きく影響していると考えられる。

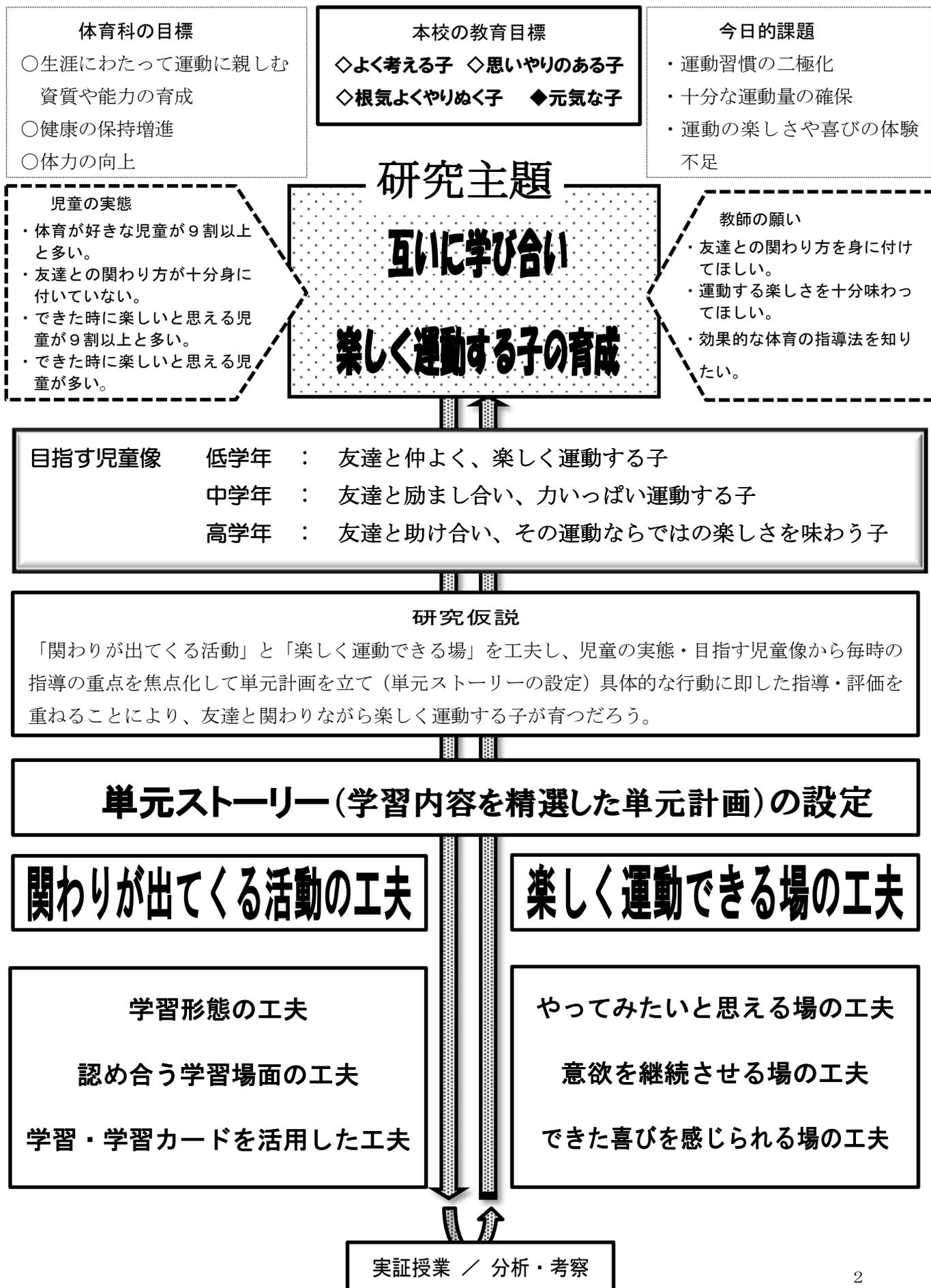
一方、教師の立場からみると、体育科は、年間計画はあっても教科書がなく、毎時間の指導について他教科に比べ、情報を得られにくい。よって指導法がよくわからず、自信がもてなかったり困り感を抱いたりすることも多い現状がある。

このことより、本校では平成26年度から体育科を窓口として研究を進めることにした。また、どの領域においても楽しい体育学習を展開することができるよう領域を一つに絞らないこととした。

平成26年度は、まず、体育学習における「楽しい」とはどんなことを指すのかを考えた上で、授業作りを中心に研究を進めた。研究を通して、児童が喜んで運動に取り組む姿が見られ、一定の満足感は得られているが、各運動特有の楽しさを必ずしも十分に味わえていない、友達との関わり方が十分には身に付いていない、協力して学習を進め課題を解決していくことがうまくできないなどの実態も浮びあがり、①各運動特有の楽しさ②友達と関わる楽しさ③考え工夫して取り組むことで動きを身に付けていく楽しさを味わうことができるようにすることが大切であることが分かった。

そこで平成27年度からは、幼児の頃からの運動経験が少ない実態や友達と関わる経験が不足している実態を考慮し、①この単元で何を身に付けることができるようになるのか。そのために毎時間の重点をどのように配列することが効果的なのか。②各運動領域の楽しさや系統性を捉え、発達段階に応じてどのように運動の場を工夫して指導していけばよいのか。③関わり方を系統的に捉え、どのように積み上げて指導していけばよいのかを中心とした授業づくりについて研究していくこととし、本主題を設定した。

3 研究構想図



4 研究の視点

(1) 授業づくりの前に…

研究の始めに以下の2点をおさえながら進めていくこととした。

① 体育における「楽しさ」とは何か。

- 運動そのものが楽しい…高い技能がなくても、今もっている力で十分得られる楽しさ
 - 友達がいる楽しい…協力したり、認め合ったりするなど関わることによって得られる楽しさ
 - できるようになって楽しい…自分の伸びを感じるによって得られる楽しさ
- これらの楽しさを十分に味わわせることができるよう工夫していくことが大切であると考えた。

② 関わりのおお切さとは何か。

関わることは、上記したように、重要な楽しさの1つである。友達との関わり方を学習指導要領の内容に沿って、系統的に指導することで、友達のよさを見付ける目、チームのよさを見付ける目、さらには、技能ポイントを見付ける目を育てることにもなる。これらの目を育てることで、教え合いへと発展し、思考・判断の向上、技能の向上も期待できると考えた。

(2) 今年の研究で目指すもの

① 単元ストーリーの設定

児童を低・中・高の各2年間を通して育てる。一つの単元で全て身に付けさせなければいけないのではない。児童の実態や学習の時期に応じて学習内容を精選する。

2年間を見据えた年間指導計画を今後、精査していく。

② 関わりが出てくる活動の工夫

関わりが出てくるようにするために、より効果的な学習形態、学習資料・学習カードを探っていく必要がある。また、仲よくする場面、励まし合う場面、助け合う場面を意図的に作り、系統的に育てる。

系統性を検討していきながら、関わりのお積み上げを行っていく。

③ 楽しく運動ができる場の工夫

どの領域においても、どの学年であっても、「やってみたくお思える場」「意欲を継続できる場」「できた喜びを感じられる場」を準備し、児童に体育学習の楽しさを十分味わわせる。

様々な学年と領域で研究授業を行い、具体的に工夫していく。

5 研究内容

(1) 単元ストーリー

まず、児童の実態や年間計画を見通し、この単元では児童が何を身に付けることができるようになるのか精選する。それを達成するために、毎時のねらいをどのように配列するのか。学習活動を具体的にどのように工夫していけばよいのかを考え、単元計画を立てていく。

(例) 年間指導計画

(例：3年 ゲーム領域)

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
内容	ベースボール型 ゲーム 【キックベースボール】				ネット型ゲーム 【ソフトバレー】		ゴール型ゲーム 【セストボール】			ゴール型ゲーム 【ラインサッカー】	

単元計画

1	2	3	4	5	6	7	8
学習の仕方を 知ろう	みんなで規則を守って 楽しもう	チームですばやくアウトをとろう	チームで声を掛け合い 得点しよう	友達のよいところをた くさん見つけよう	3の2規則 で楽しもう	みんなで声を掛け合っ てゲームを しよう	全員が全力 を出し切ろう

単元前半は、態度面を強調して具体的に指導する。

単元中盤は、関わり方について具体的、重点的に指導をする。

思考・判断について

規則の工夫だけにしない。作戦は、この単元では扱わず、他の単元で重点的に指導する。

単元計画を立てるに当たって、児童の実態(クラス替えが行われたばかりである、中学年になって初めてのゲーム領域単元であるなど)や年間計画(今後ゲーム領域の単元が3つあるなど)を考えた上で、児童がこの単元で身に付ける内容を精選していくことが大切である。

そして、確実に身に付けていけるよう毎時間のねらいをどのように立てて、単元を構成していくかを考えることが重要となる。

毎時間の指導では、ねらいについて重点的に指導し、振り返りと連動させ、身に付けたことを確認するとともに、意図的な発問で児童の言葉から次時のねらいを引き出し、単元を通して児童の思考が切れずに流れのある学習活動にしていくこと、主体的に学ぼうとする態度が継続できるようにすることが大切である。

児童の側から見ると、本時のめあての必要性を感じ、何を学び、どんな力を付けていくのかが分かる。主体的に活動し、活動中や活動後に自己評価し、次時へのめあてを立てていく。そのように活動できる単元としたい。

(2) 関わりが出てくる活動の工夫

①学習形態の工夫

達成型の運動（器械運動、水泳、走・跳の運動）の学習であっても、児童相互の関わりがより出るように、ペアやトリオ、チーム、兄弟チームなどの学習形態を工夫する。



【5年 マット運動】

トリオ学習を行った。
発表会を単元の最後に
設定し、トリオでの教
え合いが効果的になる
ようにした。

チーム学習を行った。
個人の伸びをチームで
合計し、チームとして
どれだけ伸びたかを競
うことにした。



【4年 走・跳の運動（高跳び）】



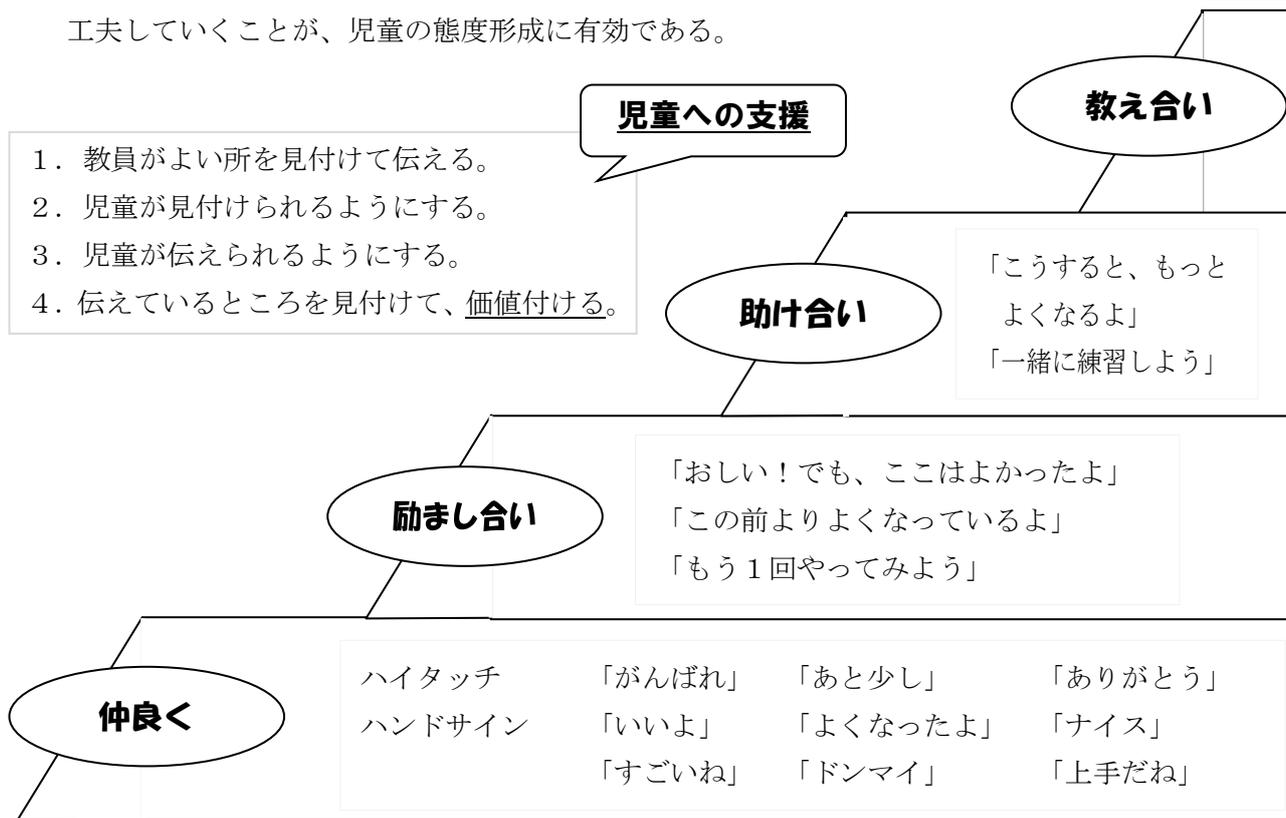
【1年 鬼遊び】

チームとは別に、学習ペア
を作った。しっぽを付けた
り、ハイタッチをしたり、
応援したりするようにし
た。

②認め合う場面の工夫

低学年から互いに認め合う経験を積み重ねていけるように意図的に活動を工夫していくことが、児童の態度形成に有効である。

中学



1年 → 6年

(実践例)



〔2年 鬼遊び〕



〔3年 キックベース〕



〔5年 幅跳び〕

にこにこタイム

友達のよさを伝えたり、ハイタッチをしたり、ハンドサインをしたりして、友達との肯定的な関わりが増えるようにする。

ほめたいむ

試合後、挨拶のときに、相手チームのよかったところを伝え合う時間を作る。相手を認め、勝ち負けに関わらず励まし合える機会となるようにする。

ポイントタイム

友達のよさを見付け、自分に取り入れられるようにする。また、技のポイント（技能ポイント）として、友達と共有し、助け合いに生かす。

③学習資料・学習カードの工夫

低学年

ふわふわ言葉集め（体づくり運動）



友達から言われてうれしかった言葉を書き込みながら集めていく。児童がいつでも見られるように教室に掲示する。

攻め方見付け（鬼遊び）



攻めるときによかった動きや友達のよい動きを伝え合う。自分の動きだけでなく、友達の動きにも注目するようにする。

中学年

友達のよさ集め（キックベースボール）



児童から出た友達のよさを、励ましの言葉と技能につながる言葉に分ける。色分けをして、友達への声掛けに使えるように掲示する。

チームカード（高跳び）



チーム全員が一度に振り返りを書けるチームカードにして、お互いのめあてが分かるようにしたり、みんなで目標を確認したりする。

高学年

技能ポイントが載った学習資料（水泳）



技能ポイントが載った学習カードをビート板に乗せて見ながら実践練習を行う。トリオの友達もカードを見ながら、すぐにアドバイスできるようにする。

ICTの活用（ハンドボール）



大型デジタルカメラを使って、友達の動きを撮影し、動画を見ながら、アドバイスができるようにする。また、友達のよい動きも見ることができる。

(3) 楽しく運動できる場の工夫

① やってみたいと思える場の工夫



誰もがその運動の楽しさを味わえる場作りをする。遊びを盛り込んだ場や今もっている力で楽しく取り組むことができる運動を設定する。

じゃんけんをしてしっぽを取るゲームやリズム水泳など、運動が苦手な児童でも運動を楽しめる場を作ること、意欲的に取り組むことができる。



② 意欲を継続させる場の工夫



単元を通して、児童が意欲を継続して楽しめるように、また、練習を重ねていくことができるように工夫することが必要である。例えば、規則を工夫したり、ゲームの名前をクラスで考えたりして意欲を継続できるようにする。単元の終わりに発表会を設定し、発表する目的を作る。そこを目指して一人一人が力を高めたり、グループで協力して練習したりして、主体的に学習を進められるようにすることができる。

③ できた喜びを感じられる場の工夫

体育の学習においては、できる、できないがはっきりするものが多い。事後アンケートを見ても、「できるようになったときに楽しいと感じる」と答える児童は多く、「できるようになりたい」思いを実現できる場は必須である。毎時間、記録会を行ったり、思いきり運動できる用具の工夫、コートなどの工夫をしたりすることで、積極的に学習に向かうことができる。



6 研究経過

平成26年度

全体会	4月16日(水)	
5年 器械運動「マット運動」	6月11日(水)	指導主事 片山 伸哉 先生
6年 水泳	7月 9日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
全体会	8月28日(木)	
1年 体づくり運動	10月29日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
3年 ゲームゴール型「セストボール」	11月26日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
2年 跳び箱を使った運動遊び	1月21日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
4年 走・跳の運動「小型ハードル」	2月 3日(火)	指導主事 増嶋 広曜 先生
全体会	3月18日(水)	

平成27年度

全体会・分科会	4月15日(水)	
6年 ボール運動ゴール型「ハンドボール」	6月24日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
4年 走・跳の運動「高跳び」	7月 8日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
1年 マット運動遊び	9月16日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
5年 走・跳の運動「走り幅跳び」	11月 4日(水)	指導主事 片山 伸哉 先生
2年 ゲーム「鬼遊び」	12月 9日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
3年 ゲームゴール型「ラインサッカー」	1月20日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
全体会(まとめ)	2月10日(水)	
全体会(来年度に向けて)	3月10日(木)	

平成28年度

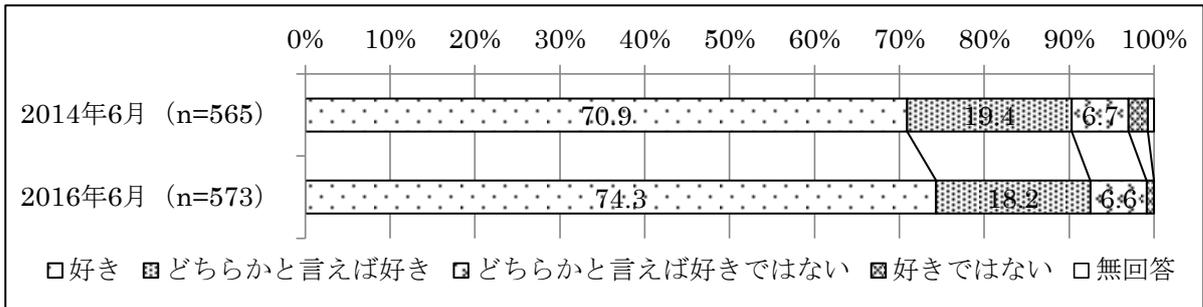
全体会	4月13日(水)	
4年 走・跳の運動「高跳び」	4月27日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
2年 ゲーム「鬼遊び」	5月11日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
3年 ゲームベースボール型「キックベースボール」	5月23日(月)	指導主事 増嶋 広曜 先生
1年 ゲーム「鬼遊び」	6月 8日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
5年 器械運動「マット運動」	6月29日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
6年 水泳	7月 6日(水)	指導主事 増嶋 広曜 先生
全体会	8月30日(水)	

II 研究の成果と課題

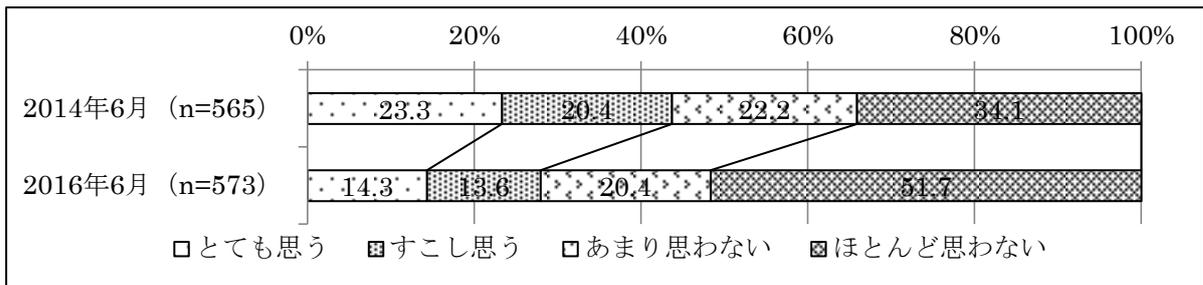
1 成果

(1) 意識調査からみられた児童の変容【研究初年度（6月）と今年度（6月）の比較】

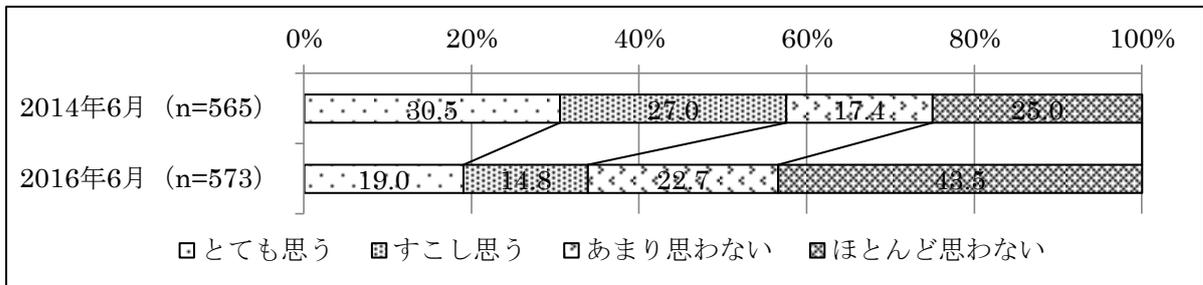
① 体育の学習は好きですか。



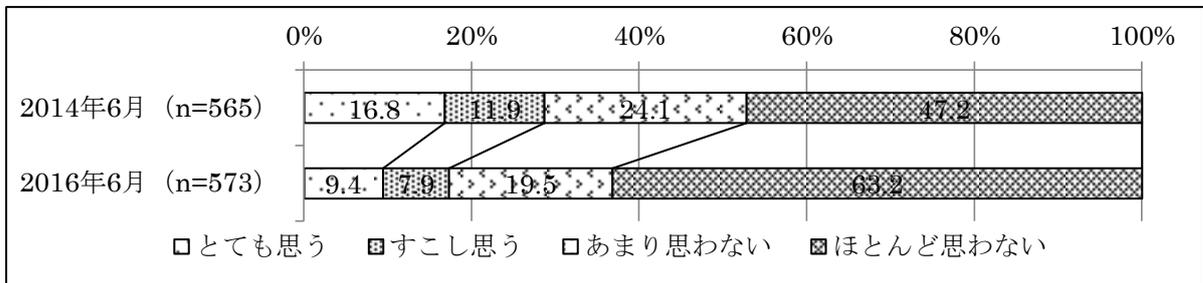
② 技やゲームがうまくできないことに困っている。



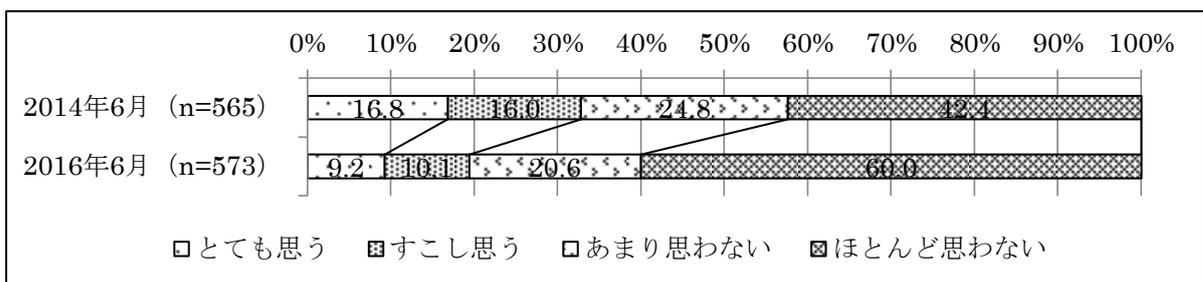
③ 学習の仕方が分からないことに困っている。



④ 協力の仕方が分からないことに困っている。



⑤ 友達への言葉掛けが分からないことに困っている。



- ・ 9割超の児童が変わらずに「体育が好き・どちらかといえば好き」と回答した。
- ・ 上記②～⑤の回答から、「体育の学習での困り感」について、大きく減った。
- ・ 特に③「学習の仕方」、④「友達との協力の仕方」、⑤「友達に対する声のかけ方」について顕著な結果が見られた。体育の学習に困り感をもっていた5割～7割以上の児童が、2割程度に減少した。また、低・中・高学年で比較すると高学年ほど困り感の減少が大きかった。

(2) 工夫した取組でみられた児童の変容

① 単元ストーリー（学習内容を精選した単元計画）の設定

- ・ 教師が児童の実態から身に付けるべきことを精選し、そこに至る毎時のねらいを吟味し、配列を考えて単元計画を立てたことで、一時間ごとのねらいを達成する学習ができた。
- ・ 身に付けるべき内容を、低・中・高学年の2年間で無理なく積み上げることに教師が見通しをもてたことで、焦点を絞った指導と評価ができ、児童の学習内容の定着につながった。

② 関わりが出てくる活動の工夫

- ・ 学習形態を工夫し、ペア・トリオ・トリオトリオ（6人）・チーム・兄弟チームで学習したことで、お互いを見合ってアドバイスし合う姿が多く見られた。
- ・ 「にこにこタイム」「はげましタイム」「ポイントタイム」「振り返りタイム」等、学年に応じた学習場面を工夫したことで、仲よく、励まし合い、助け合う態度が身に付いた。
- ・ 掲示物や学習カードを工夫し、動きのポイントを示し、練習の仕方や作戦を選んだりできるようにしたことで、友達への具体的な言葉掛けや助言ができるようになった。

③ 楽しく運動できる場の工夫

- ・ 遊びを盛り込んだ場や、今もっている力で楽しく取り組める「やってみたいと思える場の工夫」をしたことで、児童の学習意欲が高まった。
- ・ ゲーム領域では、みんなが楽しめる「学級規則・ルール」を作ったことで、得意な児童も苦手な児童も楽しむ姿が見られ、以前と比べて一層励まし合ったり助け合ったりする学習につながった。
- ・ 器械運動系領域では、単元の最後に発表会を設定したことでグループ内での高め合いの意欲が高まった。
- ・ 「コートの大ささ」「ボールの工夫」「記録会」など、一人一人の実態に合った場を工夫したことで、児童が「できた」喜びや達成感を味わうとともに、「できそうだ」という見通しから、児童の学習意欲が高まった。

(3) 教師の授業力の向上

- ・ 単元に入る前に「単元ストーリー」を組み立てたり、学年・分科会で授業を見合ったりしながら研究を進めたことで、学習の流れや場の工夫の仕方を共通理解でき、指導のバリエーションを増やすことができた。また、研究授業で取り組んだ単元以外の学習でも、工夫を加えながら行うことが定着しつつある。
- ・ ねらいの明確化とねらい達成のための指導の重点化を意識して、指導を進めることができつつある。児童の学習中の姿を評価し、それに対応した指導をその場で行うこともできるようになってきた。

2 課題

(1) 研究の活用および日常化

- ・研究していない領域についても本研究の成果である「学習活動の場の工夫」、「児童相互の関わり方の工夫」について生かして取り組むこと。
- ・今後も、教師が児童の実態と運動の特性を捉え、学習のねらいを焦点化し、指導と評価を一体化させながら学習指導に当たること。

(2) 研究の一般化

- ・誰がどの学年の担任になっても同じように指導ができるよう、学習資料を整理し残すこと。
- ・体育授業における運動量の確保とともに、授業以外においても校内で体を動かせる機会を確保し、運動の日常化を進め、児童のさらなる体力向上を図っていくこと。

おわりに

副校長 佐々木 祐介

4年後の東京オリンピック・パラリンピックを好機とし、生涯にわたり運動に親しむ資質や能力の基礎を育て、体力の向上と健康の保持増進を図ることは、学校教育に大きな課題として求められています。

そのために、本校の教育目標の重点を「元気な子」とし、平成27・28年度練馬区教育委員会教育課題（体力向上）研究指定を受けました。研究主題を「互いに学び合い、楽しく運動する子の育成」に設定し、「単元ストーリー」「やりたい できた」「関わり」をキーワードに体育授業を通して研究に取り組みました。

楽しく運動に取り組むことができるように児童相互の関わり合いの場を意図的に設定し、友達と学ぶことの楽しさを味わう活動の工夫をしてきました。また児童が「やってみたい」と思える魅力ある運動の場の工夫にも努めてきました。

さらに、年6回の研究授業に加え、事前・事後授業の公開、体育実技研修会を実施し、絶えず授業改善・指導力向上に取り組んできました。

また、休み時間を30分に拡大、体育朝会の内容の工夫、なわとび・マラソン月間の取り組みなど、教育活動全体を通して全教職員が一丸となって取り組んできました。

研究を進めるほど新たな課題が見えてきて、まだまだ改善の余地がある本校の研究ではありますが、本年度、研究発表の運びとなりました。この機会に多くの方々のご指導をいただくことにより、我々一人一人が指導力を高め、ますます「元気な子」の育成を図っていきたいと思います。また、私たちの研究が、少しでも他校での実践に役立つことがあれば幸いです。

結びになりましたが、練馬区教育委員会教育指導課指導主事の先生方にご指導・ご助言を賜りましたことを、心より御礼申し上げます。

○研究に携わった教職員

校長	西山 守	副校長	佐々木 祐介
1年	林 洋美	伊藤 里絵	種村 拓也
2年	杉山 郁子	鹿島 啓	松田 容子
3年	萩原 禎	唐澤 志織	塩田 英俊
4年	堀 倫子	柿原 千佳	鈴木 香織
5年	水盛 一樹	新田 加奈	長塚 大佑
6年	高原佐知子	入倉喜久子	石垣 仁
専科	磯部 透 (音楽) 喜多 映子 (少人数)	安井なでしこ (図工) 村岡 千草 (養護)	三河 広記 (理科)
きこえとことばの教室	伊澤 浩仁	池田 優子	田中千鶴子
	檜 公子	若林美年子	伊勢紗希子
			大橋 陽平